

跋

新潟大學が所藏する漢籍は、昭和二十四年以前に、前身校が所藏していたものと、新制大學に移行後に收藏したものとに大別される。前身校で漢籍を所藏していたところは、舊制の新潟醫科大學、新潟高等學校、新潟第一師範學校、新潟第二師範學校である。なかでも新潟高等學校は、史部が充實しており、經部、子部、集部にわたり基本的な文獻が揃い、殆んどが唐本である。新制大學發足後に收藏したものととしては、新潟縣の寄贈書がある。數は少ないが、唐本の善本が多い。その他、人文學部（東洋哲學、東洋史、中國文學）教育學部（東洋史、教育史、書道）教養部（哲學、法學、中國語）が収集したものがあつた。主題は多岐にわたり、舊學に屬するものは影印本が、新學のものは排印本が多い。

本學の漢籍コレクションとして特筆すべきものは佐野文庫（敬徳書院藏書）である。昭和三十六年に故佐野泰藏氏（元新潟高校教諭）より譲渡を受け、附屬圖書館が收藏することとなつたものである。

佐野家は、近世後期に出雲崎（現新潟縣三島郡出雲崎町）で廻船問屋（關東屋）兼地主として勃興してきた舊家である。佐野文庫は、泰藏氏の祖父喜平太氏（代議士・地主）が、明治、大正年間に収集したもので、國書、漢籍、近世文書等からなつてゐる。この文庫の目錄は、昭和四十九年に「佐野文庫敬徳書院藏書目錄」（新潟大學附屬圖書館編）として新潟大學附屬圖書館から刊行されている。

佐野文庫の漢籍は八六八點、七、一九七冊で、四部にわたり廣く收集されている。今日では入手し難いものばかりで、明版、清初の版を含む唐本、慶長古活字版等の古板本を含む和刻本が多數にのぼる。書、畫の論、拓本を中心とした作品が多いのも特色である。

五十嵐文庫の漢籍は、二〇二點。故五十嵐正一氏（元新潟大學教育學部教授）の舊藏書、明代教育史關係に特色が

ある。

總じて新潟大學が所藏する漢籍は、經、史、子、集、叢書にわたりよく収集され、唐本も比較的よく揃っているが、佐野文庫を中心として和刻本が多いのが特色といえる。

分類毎にその點數及び冊數を擧げれば、次のとおりである。

經部	三一六點	三、八九九冊
史部	五二二點	一一、一八六冊
子部	六三五點	六、二六三冊
集部	三八五點	三、一九七冊
叢書	六七點	六、一七九冊
新學部	七二八點	一、九九六冊
合計	二、六五三點	三二、七二〇冊

この他、準漢籍一三一點七七六冊、韓書三〇點一六四冊である。

新潟大學附屬圖書館は昭和四十七年に中央圖書館制を實施し、分館を廢止して、機構と業務の一本化を行った。したがって、漢籍の殆んどは中央圖書館の收藏するところとなった。漢籍は、主としてその形態上の特殊性から、他の和、洋の圖書とは別置して、特殊資料室を設けて集中管理することとした。

従來、漢籍の整理は、和書・洋書と同様の分類・目録法によつていたため、専門の研究者から、利用上の不便を指適されていた。集中管理したことにより、漢籍にふさわしい整理方法の採用と所藏目録の編纂の必要性がより一層強まってきた。

漢籍目録の歴史は古く、今から二千年前の漢代にまでさかのぼる。歴代の目録編纂者は、書物の流別を通して、學術の流別を行い、その源流をたどろうとしたのである。その意味で目録は學問として確立しているといえる。専門研

究者は、この傳統的な漢籍の分類・目録の體系を基礎知識として文獻を利用してゐるのであり、漢籍の書誌、書目をはじめとする多くの参考文献もまた、この傳統的な分類・目録の法に則って編れてゐるのである。従來、専門的知識のない圖書館職員が、研究者の求めに應じた漢籍の整理を容易には成し得なかつた所以である。

新潟大學附屬圖書館が、新潟縣立新潟圖書館と共同で、兩館の漢籍整理の事業に着手してから拾年の歳月が経過した。全國的にも、この種の例のない國と縣との共同事業はどの様にして生れたか、本目録の姉妹篇ともいふべき「新潟縣立新潟圖書館所藏漢籍目錄」の跋文に、その間の事情が的確に述べられてゐるので引用することとする。

『昭和五十一年十二月、東文研主催による「漢籍整理技術講習會」が當館で四日間にわたり開かれ、當館職員二名、新潟大學圖書館職員四名、計六名が出席、澤谷昭次、和泉新兩先生の指導の下に漢籍整理技術を受講した。この講習會は、當館はもちろんのこと、漢籍を相當量所藏し、今後それを整理し、目錄刊行を計畫中の新潟大學圖書館にとつては、誠に時宜を得た技術修得の機會であつた。この講習會を機に、東文研の仲介で當館と新潟大學圖書館とが互いに協力して、それぞれの圖書館で所藏してゐる漢籍の整理を行なうことが確約された。これにより、當館及び新潟大學圖書館の館長の合意のもとに、兩館の漢籍の整理研究を目的とする「漢籍整理研究會」が昭和五十二年四月に發足し、兩館職員による縣立圖書館所藏の漢籍整理の共同作業が開始された』

ここに、御指導くださった方々並びに實務擔當者を紹介する。

東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター（以下東文研東洋學文獻センターという）

澤谷昭次講師（現山口大學教養部教授）

和泉 新講師（現跡見學園女子大學文學部教授）

山本 仁（文部省初等中等教育局教科書調査官）

高橋良政（早稻田大學文學部講師）

漢籍整理研究會

新潟縣立新潟圖書館

西山 昌策

鶴卷 武則

新潟大學附屬圖書館

關口 輝

金子 芳雄

東 高明

星 和夫

齋藤 久子

東文研東洋學文獻センターの指導を受けながら、月一回の研修會を開催する一方、昭和五十五年度、五十六年度に、同センターが主催する漢籍整理長期研修會に職員二名を参加させた。昭和五十一年度から五十四年度にかけ新潟縣立新潟圖書館の目錄編纂を終了。翌五十五年三月に「新潟縣立新潟圖書館所藏漢籍目錄」が刊行された。昭和五十五年度から新潟大學の漢籍目錄の編纂に着手、三年を経て昭和五十七年度末に原稿カードの作成を終了した。その後も研修會は繼續され、昭和六十年年度末に、再調査、原稿清書などの作業を完了し、漢籍整理研究會は解散した。

この期間に、漢籍整理講習會（東文研東洋學文獻センター主催他）十四回、漢籍整理研修會（新潟縣立新潟圖書館、新潟大學附屬圖書館共催）七十八回が開催された。又、昭和五十六年に愛媛大學附屬圖書館で、昭和五十七年に新潟大學附屬圖書館で、昭和五十八年に宮城縣立宮城圖書館で、それぞれ開催された漢籍整理研修會に参加した。

まさに、研修しながら作業し、作業しながら研修を深めた十年間であったといえよう。それだけに、いつも御熱心に御指導下された諸先生方はじめ、研修に、作業に努められた兩館の諸氏の御苦勞は並大抵のものではなかったと思

われる。折から新潟大學では圖書館業務の電算化も平行して進められ、日常業務と併せて、館員には、多大な負担を課することとなった。本目録の完成は、全館員の協力なくしては實現し得なかつたことを特にここで附言する次第である。

本目録の公刊により、學内外の利用者にいささかでも益するところがあれば幸いである。内容の不備な點等につきましては、忌憚のない御叱正と御指導を切にお願いする次第である。

先に刊行された「新潟縣立新潟圖書館所藏漢籍目録」、「新發田市立圖書館漢籍分類目録」（東文研東洋學文獻センター編漢籍所在調査報告第二所收）と本目録を併せると、新潟縣内の漢籍資料の大半が網羅されることとなり、縣内圖書館間の相互利用が一層促進されることになろう。

最後に、遠路はるばる御來港され、長年にわたり、御指導くださった和泉新先生並びに東文研東洋學文獻センターの諸先生方、山本仁先生、高橋良政先生に衷心から御禮申し上げる次第である。また、終始協力を惜しまれなかつた新潟縣立新潟圖書館の伊藤新作、羽鳥松雄、奥田末司、米倉弘、青柳昭一、田沢繁保、酒井雅一郎歴代館長並びに研究会メンバーとして編纂の實務に多大な援助をされた西山、鶴巻の兩氏に心から感謝申し上げます。

學内では、漢文講讀で西嶋定生教授に、中國語では茂木信之助教授にそれぞれ懇切な講義をいただき、その他、大勢の先生方からも御指導、御協力をいただいたことに對し、厚く御禮申し上げます。

また、困難な作業にもかかわらず、終始ご協力くださった第一印刷所の皆様に對し、感謝の意を表する次第である。

昭和六十二年三月十日

新潟大學附屬圖書館整理課長

近 昭 二